

カンボジアの子供たちに会って感じたこと

西川秋美

8月26日、プノンペン空港に降り立った私たちはタクシーでホテルへ向かいました。午後7時のプノンペンの街は縦横に行き交う車、トゥクトゥク、オートバイで溢れ、道路の両サイドには商店、屋台が軒を連ねてもものすごい数の人たちが賑わっていました。なんとというエネルギーな街なんだろう！というのがカンボジアの第一印象です。

バタンバンホームランドには私の里子がいます。

今回の視察渡航に参加した主な目的はその子に会う事でした。

彼女の名前はマオ・スライレアッ。15才、高校一年生です。

スライレアッはストリートチルドレンだった6才の時ホームランドに引き取られました。

以来10年くらいのお付き合いになります。

これまで年に2、3回届く手紙で彼女の成長を見守ってきました。

幼い頃の彼女の印象は「恥ずかしがり屋さん」で、写真ではいつもはにかんでいました。

手紙の内容は「お手伝いが好き」とか「自転車が欲しい」とかいう無邪気なものから、次第に「英語の勉強をしている」「勉強が好き」「先生になりたい」といった頼もしいものになってきていました。

そのスライレアッとホームランドで初めて対面して驚きました

シャイというイメージを持っていたのにとってもよくお話をするので。

彼女は今、高校で勉強しながらサッカーをしているそうです。

なかなかの強豪チームだそうで、大きい大会にも出場して活躍している様子。

そして同時に小さい子供たちにもサッカーを教えていると言いました。

お父さんのいない子、お母さんがいてもアルコールやドラッグの依存性だったりする子供たちに、違う世界があることを見せてあげたい、と言うのです。

でも声掛けをして誘ってもカンボジアでは女子サッカーはまだマイナーで、説得するのはなかなか難しいと言いました。

私は涙が出そうになりました。

15才の少女が国の立て直しに裾野で取り組んでいる。

たかがサッカーかもしれないけれどもの凄い事をしている、と心を打たれたからです。

セカンドハンドユースが支援しているセンソックの高校生の一人は大学の医学部に進学が決まっているそうです。

(彼は今の自分があるのはユースの支援のおかげだと感謝の言葉を述べていました。)

また、建設予定校視察のために訪問した学校では、2校ともすごく大勢の父兄が集まって

新校舎の建設を懇願されました。

これまでカンボジアでは、親は子供を労働の担い手としか見ていなかったのに、今では教育を必要と考えるようになってきている、と同行した SVA の方が教えてくださいました。子供達が教育を受けて、職業に就いて、自分の生活を確立して、その上で次の世代を育てて行けばカンボジアは少しずつ豊かな国になっていくのではないかと思うのです。生命力溢れるパワフルな国民だから、きっとそうなってくれると期待しています。

セカンドハンドの皆さま、ありがとうございました。

おかげさまで普通の観光旅行ではできない貴重な体験をさせていただきました。

63才の心のスポンジは色んなものを吸収して少し重いです。

今回ご一緒させて頂いて、スライレアも、ホームランドの子供たちも、プノンペンやバッタンバンやシェムリアップの街も、そしてカンボジアという国もとても身近に感じられて、以前とは随分違う印象になりました。

ユースの学生たちにも、ペアレントの方たちにも事情が許すならばぜひ行って、見て、触れて頂きたいと思いました。

本当に良い機会を与えてくださったと感謝でいっぱいです。

蛇足ですが悔やまれることがひとつ。

英語ができたらもっと会話ができて、もっと色々な事を知ることができたのに、と残念なこと。

『ひとつの外国語とひとつの楽器ができれば人生を楽しめる』という言葉を噛みしめています。

同行したユースの渡部さんと「帰国したら英語、頑張ろうね！」と誓い合いました。